

や外観及びそれらを取り巻く環境の検討は、複数地域の比較研究においても有効な基軸となり得、怪物を通した比較史、グローバル・ヒストリーへと視野を広げることができるだろう。

この拙い文章は偏に評者の力量不足が要因である。本書に少しでも関心を持たれた方は、是非一読されたい。

(角倉拓真)

坂上康博・中房敏朗・石井昌幸・高嶋航 編著

『スポーツの世界史』

一色出版、2018年10月刊、B6版、652頁
4500+税、ISBN978-4-909383-04-4

本書は、世界21カ国とカリブ海地域、アフリカ大陸、イスラーム圏のスポーツの歴史について、総勢20名の研究者によって執筆された大著である。これまで民族や競技別に論じられることが多かったスポーツの歴史だが、本書では国や地域という枠組みのなかで論じられている。スポーツの歴史に興味がある一般読者が対象とされており、全体を通読することによって、イギリスやアメリカで誕生した近代スポーツの各国における受容のあり方や葛藤、あるいは伝統的スポーツへの影響を知ることができるだけでなく、スポーツという視点から近現代の世界史の流れとその特質を掴むことができる。

序章では、12世紀から19世紀までを射程に入れて、「ルードウス」（あそび）とみなされ、中世から近世にかけて時に軍事的・宗教的観点から批判や規制の対象にもなった身体活動が、近代イギリスで「スポーツ」（古仏語「デポール」（娯楽、慰み）の借用語）と呼ばれる特殊概念を持つ身体活動に変容するまでの長い過程が紹介される。

第1章では、近代スポーツ発祥の地イギリスが取り上げられる。18世紀後半から19世紀前半は、クリケットなど農村の伝統的な民衆の娯楽がロンドンにもたらされ、狩猟や釣りなどジェントルマンの伝統的フィールドスポーツとともに、ジェン

トルマンの消費の対象となった。スポーツ・イベントの開催や、賭けの調停・八百長防止を目的としたルール制定を請け負う初期のスポーツ・プロモーターも登場する。産業革命によって、19世紀後半から20世紀前半に福音主義的な勤労の倫理を奉ずる新興ミドルクラスが形成される。ヴィクトリア時代のイギリス社会において支配的となった彼らの価値観は、「アスレティズム」と呼ばれる教育イデオロギーとなってパブリック・スクールの教育に反映された。卒業生は国内の社会改良活動や植民地における「文明化の使命」に身を投じ、階級や国境を越えた近代スポーツの普及において重要な役割を果たす「筋肉的キリスト教徒」となった。近代スポーツは最初ジェントルマン中心のアマチュアのクラブが支配的だったが、やがてサッカーなどは労働者階級のクラブチームから出発したプロが凌駕しはじめる。また、世界中で近代スポーツが受容されるにつれて、スポーツ界におけるイギリスの地位は相対的に低下する。20世紀後半以降はグローバル化の進展に伴い、スポーツは世界中の幅広い消費者に受容されるエンターテインメントとしての性格を強めている。

第2章から第8章では大陸ヨーロッパとロシアが取り上げられる。第2章ではフランスのスポーツについて語られる。中世から近世に王侯貴族を含め広く受容され一大関連産業を形成したジュ・ド・ポーム（テニスの原型）や、19世紀に学校教育や軍事訓練に導入されたドイツやスウェーデン由来のジムナスティック、19世紀後半にイギリス人が持ち込んだフットボールなどの近代スポーツ、19世紀末から20世紀初頭に登場した自転車や自動車レースなどが紹介される。また、近代オリンピックやFIFAがフランスで組織化されたことや、20世紀中葉以降の国家による近代スポーツへの介入、柔道の国民的受容などについても触れられている。

第3章では、ドイツ近現代史における、自由な市民的結社としての性格を持つスポーツ団体とスポーツへに介入・統制する国家との相克や、19世紀にドイツで誕生した体操を中心とした複合的

な競技トゥルネンと19世紀末に拡大したイギリス生まれの近代スポーツのヘゲモニー争いなどが、トゥルネン協会をはじめとするさまざまなスポーツ団体と国家との間の関係を軸に考察されている。

第4章のスペインでは、近代スポーツは、統一国家スペインあるいはカタルーニャなど地域のナショナリズムと結びつきながら、ミドルクラスを中心に受容されていく。公教育における体育の導入はフランスと同様に遅れ、フランコ政権時代には厳しいジェンダー規範の下に置かれた。1920年代以降、メディアと結びついたスポーツの大衆化が進んだ。サッカーは早くも1926年にプロ化が容認され、フランコ政権下で大衆への政治利用の手段となり「見るスポーツ」としても受容される。独裁政権崩壊後の民主化に伴い、1980年代に体育の権限が自治州に委譲され、学校教育において体育が推進された。また、国際化も進展した。

第5章ではチェコのスポーツについて、民族主義的な体操組織で他の体操組織にも模倣されたソコル協会を母体とするソコル祭典と、オレル祭典、労働者オリンピックアド、スパルタキアードという四つの祭典を中心に論じられる。ソコル祭典には当初からパレードやコンサートなどの文化行事が付随しており、やがてマスメディア中心の総合的なスポーツ祭典に発展する。第二次世界大戦後は全スポーツ組織がソコル連盟に統合され、「社会主義スポーツ体制」が確立したが、1989年の体制転換後、結社の自由にもとづく多様なスポーツ組織が承認された。近年はチェコスポート史の視点が多様化し、ソコルと社会主義体制下のスパルタキアードの連続性についても再評価がはじまっている。

第6章は、スポーツにおける暴力と社会という観点からハンガリーのスポーツ史に焦点が当てられる。近代スポーツは階層によって受容される競技が異なり、大貴族は競馬、自由主義的な新興市民層はボート競技を愛好した。ドイツから伝播した体操は、軍隊や学校教育に導入された。第一次世界大戦前後に工業化・都市化の進展によって大衆の貧困が顕在化すると、秩序維持と軍事訓練を

目的としたスポーツが奨励され、暴力的指導が蔓延した。大戦後は右傾化と軍部によるコントロールが進行し、体育は学校教育から切り離された。また、大衆の娯楽となったサッカーは、チームごとに支持基盤となる階層が異なり、フーリガンに代表される暴力や人種主義とも密接に結びついていくほか、「消費者社会主義」路線への転換(1956)後、スポーツは経済との結びつきを強めている。

第7章では7つの継承国家に分裂した旧ユーゴスラヴィアが取り上げられる。戦間期は体育教育を通じた兵士養成を目指す国家の後押しを受けてチェコ起源のソコル運動が展開され、農村部への「ユーゴスラヴィア主義」拡大に貢献した。第二次世界大戦後の社会主義・多民族連邦国家体制下では、体育とスポーツは国民の身体訓練の手段として重視された。コミンフォルム追放(1948)後、体育とスポーツは分離し、体制の安定に伴い、スポーツは余暇管理の手段だけでなく、諸民族の融和と統合の象徴としても機能した。1990年代の連邦解体と民族紛争によって、スポーツは民族ナショナリズムと結びついたが、2000年代以降は「ユーゴノスタルジー」により、多民族の融和と共存の象徴として再評価されはじめている。

第8章では、ソヴィエト・ロシアのスポーツの歴史が紹介される。近代スポーツは19世紀の「革命的民主主義者」と呼ばれる知識人を中心に受容され、スポーツクラブが誕生したほか、体育への関心も高まった。20世紀にはさまざまなスポーツ・ヒーローが誕生し、1912年からオリンピックにも参加する。ソ連成立後は、「新しい人間」の創造が提唱され、集団性の重視から、心理・肉体の均質化への志向が見られ、軍事・学校教育における体育も重視された。また、パレードやマスメディアのような「見せる文化」が発展し、スパルタキアードが開催された。「見るスポーツ」としてのサッカーやアイスホッケーも盛んになる。冷戦期にはスポーツ強国となり、オリンピックで米ソのメダル争いが繰り返され、1980年代には東西陣営によるオリンピックのボイコット合戦が生じた。ソ連解体(1991)後の資本主義化により貧富の差が拡大し、スポーツ界は国家の支援を

失ったが、テニスやボクシングが盛んになった。その後ロシア経済の発展を背景に、プーチン政権下でふたたびスポーツ振興政策が強化された。ソチ五輪のドーピング問題に端を発する国際大会からのロシアの締め出しは、ロシア国内のナショナリズムを煽る結果となった。

第9章では近代スポーツの「第2の母国」アメリカが取り上げられる。17世紀以降、植民地成立の背景やキリスト教の宗派・社会構造が異なる南部・中部・北部で違いは見られるものの、白人植民者による余暇・娯楽活動が行われ、階級や地域を越えた連帯感の強化に役立っていた。独立革命後は、反英主義や福音主義の台頭による娯楽抑圧、領土拡張に伴う農業国家への転換と娯楽の小規模化により、アメリカの娯楽は独自に発展しはじめる。19世紀にはイギリスの伝統的娯楽の再評価と回帰が見られたほか、近代スポーツも伝播する。産業革命により近代的な階級社会に転換した18世紀末以降は階級ごとに娯楽が分かれた。中間層の福音主義者は、動物掛け・闘鶏など下層階級の娯楽を批判し、「筋肉のキリスト教運動」を通じて近代スポーツの普及を図った。やがて3大スポーツ（野球、アメリカンフットボール、バスケットボール）をはじめ独自の近代スポーツが誕生する。20世紀には軍事訓練へのスポーツ導入、体育の必修化が行われ、スポーツが国家・州の政策に組み込まれた。また、アメリカン・ドリーム象徴や愛国心高揚の手段ともなり、階級を結びつける手段として機能する。冷戦期にはオリンピックなどでソ連とメダル獲得競争を繰り返して、冷戦終結後はグローバル化に伴う市場拡大によってアメリカのプロスポーツは世界規模の影響力を持つに至る。そのいっぽうで、人種・エスニックマイノリティの統合やジェンダーによる待遇格差など、克服されたとはいえ難い問題もある。

第10章～第18章では、近代以降イギリス・アメリカによる植民地支配や強い政治的・経済的影響を受けた国や地域が、いかに近代スポーツを受容あるいは拒絶したかを中心に論じられる。第10章のカリブ地域においては、ジャマイカなどイギリスの旧植民地ではクリケットが人種・階層

を認識させる政治的装置として機能しながら定着したのに対し、19世紀後半以降アメリカの影響下で野球が盛んになったキューバやドミニカなどの旧スペイン領では、アメリカと密接な相互関係（選手の供給地・貧困脱出の手段）が構築された。近年は、グローバル化によってバスケットボールや陸上短距離走の選手も輩出されている。

第11章では、19世紀に白人エリート層のスポーツとして出発し、1930年代に統一国家のアイデンティティ形成に利用され、やがて人種差別問題や人種混淆に対する劣等感に直面しながらも、先住民や黒人選手をも包摂し、ブラジル独自のサッカーの美学が形成されていく過程が紹介される。

第12章では、スペインから独立後、イギリスの経済的影響により19世紀に現地のイギリス人コミュニティから近代スポーツが伝播したアルゼンチン・ウルグアイ・チリが取り上げられる。サッカーの場合、現地エリート層に受容された後、学校教育や労働者の互助組合を通じて中・下層民にまで伝播した。19世紀末からYMCAなどを通じてアメリカのスポーツが普及する。20世紀にスポーツはポピュリズムと結びつき、カリスマ政治家や軍事政権の大衆扇動の手段として利用され、スポーツのプロ化も進んだ。国家とスポーツ団体との関係は国ごとに違いが見られる。

第13章ではオーストラリアが取り上げられる。「バラシ・ライン」と呼ばれる東西境界線の東側で盛んなラグビー・リーグは、交流戦を通じて宗主国イギリスとの絆を確認する手段であると同時に、オーストラリア・ナショナリズムの支柱ともなった。境界線の西側で盛んなオーストラリアン・フットボールは、19世紀以降独自のルールを制定して発展した。近年は、メディアとビジネスの結びつきにより、軍国的ナショナリズムや反人種主義のキャンペーンに利用される「見るスポーツ」と、クラブを基盤とし、地域・ジェンダー・人種などと結びついた「するスポーツ」がオーストラリアのスポーツの支柱となっている。

第14章ではサハラ以南のアフリカが取り上げられる。19世紀のアフリカ分割により、「文明化の使命」を担うキリスト教伝道団体や欧米の教

育者がアフリカに渡り、「アスレティシズム」や「筋肉的キリスト教」理念を实践すべく、現地人対象のエリート校にクリケットやサッカーを導入した。軍隊や娯楽目的のイギリス人のクラブもスポーツ普及に貢献した。スポーツはアフリカの地域・集団のアイデンティティの拠所になると同時に、人種・民族別のクラブや階層的な競技会システムなどによって植民地の社会的枠組みを顕在化・意識させる装置ともなった。20世紀後半以降は、政治とスポーツが結びつきを強め、独立運動や反アパルトヘイト国際キャンペーンに利用されたほか、国民統合の手段となった。第16章のインドにおいても、クリケットやサッカーをはじめとする近代スポーツの伝播と普及の状況は似通っており、イギリス統治時代には民族・宗教対立を煽り、被支配層を分断する手段として機能したが、20世紀以降は国民意識の形成にも寄与した。

第15章は中東地域・北アフリカのイスラームに注目する。ムスリムの人びとにとって、近代スポーツは欧米の近代から学び、対抗するための手段として受容された。サッカーなどは、イスラームの地域社会に浸透すると同時に、ムスリム移民がヨーロッパで活躍している。女性のスポーツ参加の是非については多様な考え方があり、今日なお模索が続いている。

第17章のシンガポール、第18章のフィリピンでは、他の旧植民地同様「文明化の使命」の一環として宗主国のイギリス、アメリカからそれぞれスポーツがもたらされたが、20世紀以降中国や日本とも密接なかかわりを持つようになった点が特徴的である。

第19章の中国では、19世紀末以降、身体鍛錬が民族・国家を救う手段とみなされはじめ、ミッションスクールやYMCAを通じて近代スポーツが受容・組織化され、体育教育も推進された。やがてナショナリズムによって欧米の影響が排除され、国民党政権時代には国威発揚の手段としてスポーツが利用されるとともに、全国民の軍事化を目的に体育が義務化された。中華人民共和国成立後も、時々の政治路線によって大衆スポーツとエ

リート競技スポーツのいずれかに比重が偏るものの、一貫して国家主導でスポーツが奨励され、国際社会へのイメージ戦略や国威発揚などに政治利用され続けている。第20章の朝鮮／韓国においても、19世紀末に近代スポーツが導入され、YMCAのほか日本を媒介として、おもに学校教育を通じてスポーツが普及した。中国と同様、第二次世界大戦後から今日まで、スポーツと政治は密接に結びついており、オリンピックなどの国際大会は国威発揚の場、あるいは南北統一の主導権争いの手段として利用されている。

第21章では日本が取り上げられ、明治維新以降導入された近代スポーツと、その影響のもと「武道」に発展した伝統的な武術が、学校教育や課外活動を通じて受容される過程や、メディアとの結びつきによるスポーツ普及とプロ野球誕生、オリンピックなど国際大会への参加の歴史とその影響、20世紀後半以降のプロ化によるアマチュアリズムの終焉などについて論じられる。終章では、ドーピング、ナショナリズム、スポーツの国際的な組織化、メディアとの結びつき、身体活動を伴わない娯楽としてのeスポーツの展開など、現代のスポーツが内包する諸問題が提起されている。

本書ではナショナリズム、産業革命後の工業化に伴って新たに誕生したミドルクラスの台頭、労働者階級の余暇管理と規律化、国家による体育教育への介入、植民地支配とそれを支えるイデオロギーとなった「文明化の使命」、社会主義体制下の国家によるスポーツ統制、グローバル化、メディアが及ぼす政治的・社会的影響など、近現代史研究にかかわる重要かつ多様なキーワードがほぼ出揃っているが、評者はスポーツの歴史や近現代史が専門ではないため、以下の3つの問題点について指摘するとどめたい。

一点目は、「スポーツ」という用語の定義の曖昧さである。第2章以降、19世紀にイギリスで誕生した狭義の近代スポーツだけでなく、娯楽や気晴らしの意味を強く持つ狩猟や動物掛けのような前近代の「スポーツ」、トゥルネンやソコル、武道のような、時に近代スポーツと対峙する地域の伝統に根ざした身体文化のすべてに「スポーツ」

という言葉を当てはめたことによって、それぞれの特質が曖昧になっている章が見受けられた。とりわけ前近代の「スポーツ」は、序章・第1章・第9章などで指摘されているように、狩猟や釣りのような国王大権や領主特権と結びついた上流階級の活動は別として、中世にはテーブルゲームと同じカテゴリーで一括りにされ、近世においてもなお飲酒や賭博と密接に結びつき、道徳的・宗教的観点から批判や規制の対象となってきた世俗的な「あそび」であり、「真面目が支配する」（ホイジンガ）19世紀に「筋肉的キリスト教」理念に支えられて発展し、ホイジンガが「ピュエリリズム」と批判するような政治的手段や商業主義に利用される近代スポーツとの間には大きな隔たりがあることを絶えず意識する必要がある。

二点目は、国や地域という枠組みを設定してスポーツを論じることの限界である。この30年だけでも、かつての社会主義多民族国家を中心に国名や国境が劇的に変化している。本書においてもソ連やチェコ、ハンガリー、ユーゴスラヴィアのように、過去に分裂・解体した国家が登場するが、スポーツの歴史を長期的な視点で説明する際の地理的な枠組みの設定が曖昧になっている。また、トゥルネンやソコル、スパルタキアード祭典のような地域的にある程度の広がりをもつ身体文化を理解する際には、従来の研究で用いられてきた競技、民族・政治体制の違いなど別の枠組みでの説明による補完が必要になるのではないだろうか。英米の旧植民地でのスポーツの受容の歴史という観点であれば、帝国史など別の枠組みで論じられた先行研究と組み合わせた方が、地域ごとの差異や共通点を理解する上で容易であり、ソ連、チェコ、ハンガリー、旧ユーゴなど旧東側陣営の国であれば、スポーツを積極的に政治利用しながら独自のスポーツ文化を築いた社会主義国家体制の枠組みのなかで論じる必要があるだろう。

三点目は、二点目とも関連するが、本書で取り上げた国や地域の選択についてである。本書は近代スポーツの受容が主要テーマの一つである以上、1821年にオスマン・トルコから独立してから、1896年に近代オリンピックが開催されるまでの

ギリシアにおける近代スポーツの受容状況や、現在でもサッカーをはじめ国際大会の常連であるイタリアについての言及があってもよかったのではないだろうか。

以上の点が気にかかるものの、本書を通読することによって、近現代の世界史がいかにもスポーツと密接なかかわりを持ちながら展開してきたかということに改めて気づかされる。それと同時に、ポスト・コロニアリズムの視点から抜け落ちていた旧植民地と旧宗主国の人的・経済的な相互依存関係、前近代の娯楽としての「スポーツ」への批判から近代以降の「筋肉的キリスト教」理念にもとづくスポーツ推進へと立場を変えながら、20世紀までスポーツに影響を及ぼし続けたキリスト教など、多くの点について示唆を得ることができる。また、オリンピックなどスポーツ観戦に興味のある読者にはおなじみのスポーツ選手も多数紹介されており、スポーツの歴史に関心のあるすべての人びとに開かれた著作であるといえるだろう。

主要参考文献

J・ホイジンガ、里見源一郎訳『ホモ・ルーデンス 文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み』講談社学術文庫、2018年。

（頼 順子）